

TRANS

『『翻訳』の諸相』研究会 Newsletter No.15

2005/7/14

訃報

当研究会第二研究班のリーダーとして研究会やシンポジウムの司会・統括をして下さっていた吉田城先生が本年6月24日にお亡くなりになりました。享年五十四才でした。吉田先生はプルースト研究者として、また文学作品の生成研究の先駆者の一人として国際的に高い評価を受けていましたが、美術や舞踏芸術にも造詣が深く、また近年は日仏比較文学の領域でも研究の成果を発表なさっていました。第二研究班の研究テーマ「異文化体験とフランスの作家・芸術家」に関しては「ヴェネツィアと死の表象 シャトーブリアン、バレス、プルースト」(2004年4月)、「若き NRF 誌と『失われた時を求めて』の拒絶」(2004年9月、仏語)、「19世紀オリエンタリズム文学—テオフィル・ゴーチエ」(2004年10月)などの研究発表をして下さいました。また、当研究会のニューズレターにも数本のエッセーを寄稿して下さいました。第二研究班の活動を主導し、若い研究者たちに自ら模範を示して下さいました吉田先生に、メンバーを代表して深い感謝の念を表したいと思います。吉田先生、本当にありがとうございました。(永盛記)

活動状況

◆ 第一研究班の第 16 回研究会が、以下のように開かれました。

日 時： 2005 年 7 月 2 日 (土) 午後 1 時より

場 所： 京大会館 103 号室

報 告： 鈴木 聡 (東京外国語大学) 「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 6 歌第 24 連から第 7 歌第 15 連まで」

参加者： 秋草俊一郎、芦本 滋、鈴木 聡、中田晶子、三浦笙子、皆尾麻弥、若島 正 (以上7名)

◆第二研究班の第 8 回研究会「文学と戦争2」が以下のように開催されました。

日 時： 2005 年 5 月 7 日 (土) 午前 10 時より 12 時半まで

場 所： 京都大学文学部新館 2 階 第 2 演習室

研究発表： 1. 早川文敏 (京都産業大学講師) 「セレーヌと爆撃」

2. 辻村暁子 (京都大学大学院博士後期課程) 「シモーヌ・ヴェイユとスペイン市民戦争」

司 会： 永盛克也 (文学研究科)

(第一研究班15回研究会、第二研究班8回研究会の発表要旨を、本号に掲載しています。)

『エヴゲーニイ・オネーギン』の作者、ウラジーミル・ナボコフ

小西昌隆

似たようなモチーフの小説はナボコフにもないではないが、ここではボルヘスを引き合いに出しておこう。

ボルヘスのメナールは『ドン・キホーテ』を遺稿としてのこしている（『ドン・キホーテ』の作者、ピエール・メナール）。セルバンテスの『ドン・キホーテ』第一部のいくつかの章を一字一句たがえることなく書いたものだ。それはセルバンテスを機械的に書き写したものではない。かといってメナールがセルバンテスを完璧に暗記していたわけでもない。むしろ『ドン・キホーテ』を書こうと思いついたメナールがさまざまな下書きや推敲を経たはてに書き上げたものがセルバンテスのそれと同一だったのだ。まるで奇蹟のように美しいお伽話だが、ナボコフのプーシキンにたいするラディカルなまでの直訳主義をみると、彼の翻訳の理想形はもしかしたらこんなものだったかもしれないと思いたくなる。もちろん、ボルヘスの短篇とナボコフの仕事を忠実に比べるつもりはない。ナボコフはプーシキンを翻訳する際、実際にプーシキンを横に置いて丹念にそれを英語に移し替えているにすぎず、それどころかあらゆる細部に註釈をつけ、ときに自己弁護のように他人の翻訳を貶め、あるいは自分の訳語に多少なりとも不満をこぼさずにはいられないわけだし、自作の小説を翻訳するとなれば、オリジナルに手を加えることをいとわない。だとしてもボルヘスのメナールの創作とナボコフの翻訳は似ている。いささかナイーヴな言い方をすれば、ある完成された作品は、そうでしかありえなかった、といった信念のようなものが告白されているように思えるのだ。とりわけ「芸術的翻訳 *arty translation*」を批判し、エドマンド・ウィルソンの批判に痛烈な反批判を繰り広げる姿 (*Strong Opinion*) はいかにもナボコフ的にみえるが、逆に、ナボコフの翻訳にナボコフはいささかも含まれていないとさえいい。一見ナボコフ的な特異な語彙が批判にさらされるたび、ナボコフはそれがプーシキンの同時代の英語表現に適っていることを説明する。もっともナボコフ的にみえるところでナボコフは実は姿を消しているのであり、翻訳は、そうでしかありえないという絶対性のもとに（かりに錯誤であるにせよ）なされている。いわばナボコフ特有の、というよりも、理念的な翻訳が遂行されているかのようなのだ。おそらくナボコフは自分の翻訳が可能的な翻訳のひとつであるとはいやでも認めないだろう。それはプーシキンの創作と同質のものですらあるからだ。ただ、ナボコフが生真面目なプラトニズムの立場に就きうるのにたいし、ボルヘスの場合、皮肉のこもった寓話だったのはたしかだが。

しかし、ボルヘスの短篇において『ドン・キホーテ』がセルバンテスのそれとしての同一性を揺るがせ、それ自体がシミュラクルと化してしまうのになぞらえれば、ナボコフ的な翻訳＝理念化のもとでプーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』も——おそらくナボコフの意図に反して——プーシキンという帰属先を失うのだといってもいいだろう。ナボコフの翻訳態度をこのように延長することができるなら、おそらくそこにおいて、ベンヤミンの翻訳論と響きあう。周知のように、ベンヤミンの考える翻訳は、一般的に翻訳に必要とされるような受容者（翻訳の読者）にたいする考慮を否定し、したがって、原作の意味を伝達するものではありません。ベンヤミンのいう「翻訳者の使命」は、純粹言語への奉仕としてある。ベンヤミンもまた「歴史のメシア的終末」といったある種のプラトニズムに立って、生真面目に原作のもつ翻訳可能性（翻訳の必要性）、純粹言語について説くわけだが、そこでみておきたいのは「原作と翻訳の地位の差」を純粹言語のもとにあっさり否定している点にある。ベンヤミンはヘルダーリンのソフォクレス翻訳にみられる意味を毀損してしまうまでの逐語性の根拠にふれて、まるでナボコフの『チョルブの帰還』か『Ultima Thule』に出てくるようなメタファーでこういつている。

つまり、ひとつの器のかけらを組み合わせるためには、それらのかけらは最も微細な部分に至るまで互いに合致しなければならないが、だからといって同じ形である必要はないように、翻訳は、原作の意味にみずからを似せるのではなくて、むしろ愛をもって細部に至るまで、原作のもっている志向する仕方を己れの言語のなかに形成しなければならない。そうすることによって原作と翻訳は、ちょうどあのかけらがひとつの器の破片と認められるように、ひとつのより大なる言語の破片として認識されうるようになるのである。（「翻訳者の使命」内村博信訳）

純粹言語というアイデアに支えられた議論である以上、ここでシミュラクルが浮上してくるかどうかは議論の余地があるにせよ、少なくともプラトニズムはこうした文脈において、アイデアにたいするいいコピー（原作）と悪いコピー（翻訳）のような序列は成り立たなくなる。ドゥルーズがいうようにプラトニズムのアイデアとイメージという二元論がいいコピーと悪いコピーのような「二種類のイメージのあいだの潜在的な区別」（『意味の論理学』）を設定するためのものであるとすれば、プラトニズムはここでその目的を失効している。ベンヤミン的に徹底されるならばプラトニズムはプラトニズムである意味を失ってしまうだろう。

そしてそれはナボコフの理念的な直訳（逐語訳）の可能性をも示しているだろう。しかもナボコフはそこにおいて、ボルヘスのメナール同様、『エヴゲーニイ・オネーギン』の訳者どころか作者の位置を占めることもできるのだ。これがナボコフにとって幸福でなくてなんだろうか。

研究会の報告（発表レジュメ）

(1)「セリーヌと爆撃」

『城から城』*D'un château l'autre* (1957) には、セリーヌ Louis-Ferdinand Céline (1894-1961) がドイツ大使オットー・アーベッツの招待を受け、共に会食を行うという場面がある。この場面でまず最初に焦点が当てられているのは、アーベッツの現実認識の甘さだ。半年前にすでにパリは解放されドイツ軍は撤退を続けている。小説で描かれるのは 1945 年の初め頃、セリーヌがその残虐さを強調するルクレール將軍の部隊が国内に侵攻してきており、そしてもちろん東側からもソ連が押し寄せてきている時期である。再三ドイツの、すなわち自分たち自身の暗い先行きという現実を指摘しようとするセリーヌに対して、アーベッツはあきらかに現実を見ていない、ある意味で非常に夢想的な考え方をしている。

表面上はアーベッツに気を遣いながらも、そんな彼に対して内心ストレスを溜めていたセリーヌの前に現れたのが、シャトーブリアンである。彼はかつてゴンクール賞を受賞した著名な作家だった。しかし第一次世界大戦への従軍の経験を経たのち、*La Gerbe des forces* という著作で対独協力とヒトラーへの敬愛を訴える。第二次世界大戦中には「グループ・コラボラシオン」という団体を主催した、筋金入りの対独協力者であり、ヒトラー主義者でもあった。この会食の場面で注目されるのは、アーベッツとシャトーブリアンがごく些細なことから仲違いを始め、シャトーブリアンが暴れ出すという事態である。

ここでシャトーブリアンが破壊するこのドレスデン磁器というのはもちろん、磁器の生産で有名な、ザクセン地方の中心都市の名前から来ている。ところでこの町は、第二次世界大戦にヨーロッパで最大規模の爆撃が行われ多くの人命が失われた、有名な悲劇の舞台でもある。『城から城』が発表された年代や当時の読者の知識、経験を考慮すると、この発作的に起こる食器を破壊する行為が、あの忌まわしいドレスデン爆撃を暗示していると考えられる。

さまざまな草稿のヴァリエントを調べたゴダールは、このシャトーブリアンの錯乱のシーンがおそらく完成間近に付け加えられたものだと考えている。だとすれば、この食事会という一連のエピソードはたいへん興味深い分析の対象になるのではないかと思われる。その場に居合わせたアーベッツらに対する攻撃的表現を強烈なものにするために、ドイツ人にとって恐ろしい経験であるドレスデンという言葉を用いたのはあまりにも明らかだが、それと同時に、より隠れた次元で、この場面には別のベクトルを持った意識が伺えるかもしれない。その理由として何より重要なのが、ドイツ爆撃の暗示を直接行っている主体が、対独協力者としてセリーヌよりも積極的な活動を行っていたシャトーブリアンとなっていることだ。シャトーブリアンに与えられた役割に注目することによって、作者の政治意識の一面を探ることができるのではないだろうか。

(早川文敏)

(2)「シモーヌ・ヴェイユとスペイン市民戦争」

シモーヌ・ヴェイユ Simone Weil (1909-1943) の思索活動の底流には鋭い倫理的問題意識が

常に存在していたが、それは晩年に向かうにつれてより明確化し、1940 年頃から宗教的思索という形をとるようになった。この思想の転換点に位置する経験が、スペイン市民戦争である。

この内乱は、1936 年、スペイン共和派政府に対する軍部の反乱から始まった。ヴェイユはこの頃ソビエト共産主義の怪物的官僚主義化を徹底して批判し、左翼の革命理念そのものに疑念を抱いてはいた。しかし人民の尊厳を求めて立ち上がったスペインアナキズムへの共感から、内乱が勃発するとすぐに共和派の義勇兵としてアラゴン戦線に赴いたのである。

ヴェイユは負傷の後に戦場を退いてからも、公的にはスペインアナキズムを擁護し援助する立場を崩さなかった。しかし他方で、自身が戦場で見たもの一大義を盾とした無造作で気軽な殺人一についての内的思索を深めていく。彼女はこの従軍の経験をきっかけとして、ソビエト共産主義批判において深められつつあった考察をひきつぎ、人を途方もない悪へと巻き込んでいく「政治」の問題を、悪に迎合し自ら埋没しようとする人間の本性そのもののレベルから考え始めていた。

彼女がこの問題に初めて言及したのは、カトリック作家・ベルナノスへの手紙においてである。彼は『月下の大墓地』(1938)の中で自らが与していたフランコ派による無差別的な大量殺戮を告発し、これらの殺人は「恐怖」の感情から為されていると言明した。ヴェイユは、彼の党派精神に縛られない道徳的勇気を称えつつも、この殺戮の問題に関しては、一旦共同体のモラルの枠から解放されれば、人間の本性は人を殺さずにはおれないもので、そこにあるのは「恐怖」というよりも、むしろ殺人行為の「醜悪」であると反論する。

「人間の尊厳」を目的とした革命運動は、人間を(それが人民であれ、敵であれ)「もの」として扱う心性に支配される。このような人間性に対する「素晴らしき無関心」は、革命運動に与する人間が、自らの行使する力への醜悪の中で、他者を侵犯する行為そのものによって、自己を「善」の側に位置づけることに依る。力は人を殺し、文字通りの意味で人を「もの」にするが、殺さないままでも、人間の内心の「自由」を失わせ、人を「もの」にする。ヴェイユは「絶対善への乾き」が人間の存在そのものを規定すると考えるが、人間が心の奥底まで力に従属してしまうことは、この善の渴望、正当化の欲望の強さに由来すると考えた。そして彼女は、力と善を混同するその醜悪の裏に、人間の「虚無」への深い不安を見る。

ヴェイユはこの経験の後、次第に神秘的思索に没頭していく。力への陶醉を増幅するニヒリズム的精神状況の中、神なき後の人間の存在根拠の問題、つまり、人間が善といかに関わりうるのか、というカントが 18 世紀に提出した問題が、新たな形で問われなければならなかったのである。ヴェイユにとって、力への従属から人間が免れうる可能性、つまり人間の「自由」の可能性を探ることは、「善と必然(力)の隔絶」というプラトンの命題を徹底させ、政治思想、宗教思想の根底に据えるという精神的作業を通してのみ可能であったのである。

(辻村暁子)

(3) 「テキスト輪読: Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from the Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press, 1975.」範囲: 第 5 歌第 35 連から第 6 歌第 23 連まで

今回の範囲のおしまいに、「ロマンティック」(romantic) という一語に関する 5 頁にも及ぶ註がある。中身のつまった註であるにもかかわらず、読後に残るのはむしろ空虚な印象のみである。それはなぜか。「ロマンティシズム」という語は、レンスキイが決闘前夜に書いた生涯最後の詩について、プーシキンが「世間で言うところのロマン主義にあたるのだろうが、私はここに少しもロマン的なものを認めない」と説明する形で使われる。そこでナボコフは当時、つまり 18 世紀末から 19 世紀初頭における「ロマン主義文学」の概念を確認しうる 11 の「型」を、まるで動植物を分類するような調子で細かく列挙する。ナボコフにとって、「主義」だとか「派」によって芸術作品を分類するのは実にくだらなことであり、興味があるのは個人としての作家の手になる芸術作品そのものだけであったというのはよく知られた事実で、この註の中でもそのことは暗示されている。その上で、「古典主義」、「センチメンタリズム」、「リアリズム」、「ロマン主義」といった不明瞭な用語の定義付けを試みている。この内三つ目までは比較的簡潔に定義しているが、ロマン主義という語に関しては「少なくとも」11 の型に分けられると言い、従って実際はさらに細分化され得るであろうことが推測される。

この 11 のロマン主義の型についての解説を読んで想起せずにおれないのは、ナボコフの小説『青白い炎』である。どうした訳か主に前半の定義、例えば幻視、超現実的な物の出現に特徴付けられる「ドイツ亜種」や、「スコットランド高地亜種」の「不気味な調子」は、キンボートによる註釈の文章の一部を思わせるし、「ロマネスクな人物」の定義はキンボート描くところのチャールズ王を微かに思い起こさせる。一方、主に古典派の対立概念としてのロマン派の特徴が強調される後半の区分は、ジョン・シェイドの詩の特徴に通じる。例えば、センチメンタリズムには見られない「豊富な詳細」がロマン主義の一特徴であるとか、旧来の厳格さや慣習を脱した自由な形式で書かれる作品 (*Lyrical Ballads* の基本的主張と重なりそうだが、当然この註にワーズワースやコールリッジの名は一度も出てこない) といった説明は、そのままシェイドの詩に当てはまる。また、キンボートが当初シェイドに書かせたかった詩とは、チャールズ王を主人公とした「伝奇物語」であり、アルカディアの要素も含む武勇物語である。これはナボコフによる一番目の定義に当たると言えよう。一方シェイドが実際に仕上げた作品は、米国北東部の地方色豊かな(「地方色」も上記のロマン主義定義中の「詳細」に含まれていることに注意したい)、自伝的かつ風刺的な詩であるが、キンボートに言わせると「古めかしく」、「ネオ・ポーピアン」ということになり、彼にとっての「ロマンティック」とは相容れないものだと言える。全く肌合いの異なるはずのキンボートの文章あるいはキンボートの夢見る詩形式と、シェイドの詩が、こうして「ロマン主義」の特徴によって同じカテゴリーの中に収まってしまうのである。しかし、両者ともロマン主義的特徴が見られると言ってみたとところで、当然それは何ものをも意味しない。

『ヨーロッパ文学講義』の中にも、ロマンティックという言葉に拘るナボコフの姿を見つけることができる。この中で、フロベールの『ボヴァリー夫人』を、この講義で取り上

げたお伽噺の内「最もロマンティックな」小説と位置づけている。そして、「ロマンティック」という語には幾つかの意味があり、ボヴァリー夫人その人並びにこの小説について言う場合、それは夢見がちで空想癖があり、主に文学作品起源の絵に描いたような可能性について思いめぐらす傾向を持つ、そうした意味においてである」と説明する。こうした性質を更に「ロマネスク」と言い換えており、これは今回の注釈中、四番目にあがっている「ロマネスク」の定義と大体一致する。ナボコフは、『ボヴァリー夫人』が「リアリスティック」で「自然主義的」な小説であるという一般的見解を批判し、『イズム』は消え失せ『イスト』は滅び、残るは芸術のみ」と断言するその一方で、エンマの浅はかな空想癖に見られる「ロマンティック」な性質をことさらに強調する。ここで我々は、「ロマンティック」という言葉に対する、ナボコフの少々他とは異なる扱いを見て取ることができよう。『ボヴァリー夫人』、『オネーギン』の注釈両方において印象づけられるのは、「主義」や「派」を認めないナボコフも、「ロマンティック」という語に対しては何か異様な拘りがあるということであり、愛着とまでは行かないまでも、恐らく本人にも解し難いと思われる複雑な執着を持って、この語に触れずにはいられないというこの作家の姿であろう。ナボコフはこの言葉を、「主義」とか「派」の枠を越えた、より個人的な言葉として捉えたかったのかも知れない。

ナボコフが 11 に分類するプーシキン同時代におけるロマン主義の定義は、おしまいに向かうほど漠然とした性質が強まり、その 11 番目は「あらゆる文学作品について、『古典』の対立概念としての『モダン』」となっている。ここで「ロマン主義」は、「モダン」の同義語になることにより、ほとんど万能の用語と化している。そしてその後、「彼（プーシキン）自身によるロマンティックな詩の定義」について解説する。つまり最終的には、一般的定義以外に個々人の定義というものが無限に存在し、それこそが重要になるのであろう。「ロマンティック」という語の註を読んでも、「ロマンティック」という語の真の姿は相変わらず漠としたままである。言葉が仮面のように存在するだけで、中身は何とでも入れ替え可能のように見える。ナボコフはこの 5 頁にも亘る長い註を使って、この一語を具体的な言葉によって満たしていくが、実際に見えてくるのはこの一語の向こうにある虚空である。従って「ロマンティシズム」という語は、言ってみれば翻訳不可能、つまり別の言葉でいかに説明しようとしても説明しきれない、形骸化した言葉なのかもしれない。この報告中でも *romantic* を首尾一貫した日本語で表現することができず、そのあたりにもこの語が持つ曖昧さが表れているのではないか。この註は、そうした儂さ、捉えどころの無さを漂わせる「ロマンティック」という言葉それ自体、ロマンティックであるという印象さえ与える。

(皆尾麻弥)

お知らせ

◆ 第一研究班が、以下の要領で、第 17 回研究会を開きます。

日 時： 2005 年 9 月 17 日（土） 午後 1 時より

場 所： 京大会館 213 号室

報 告： 三浦笙子（東京海洋大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 7 歌第 16 連から第 55 連まで」

◆ 第二研究班の第9回研究会「越境する文化2」は 2005 年 9 月第 4 週に予定しております。

後記：

ニューズレター*TRANS* の 15 号をお届けいたします。本号は悲しみの中での発行となりました。第二研究班長、吉田城先生ご逝去の知らせに、関係者一同言葉にならぬ思いです。大学院生の研究発表にも重点を置いた第二研究班の活動からも伺えますように、若手研究者に対する吉田先生のご教育は、温かみあふれるものでした。私事ですが、仏文の学生ではない私に対しても、研究に関する丁寧な助言、励ましの言葉をくださったことが思い出されます。心からご冥福をお祈りいたします。

（皆尾）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：皆尾）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>

